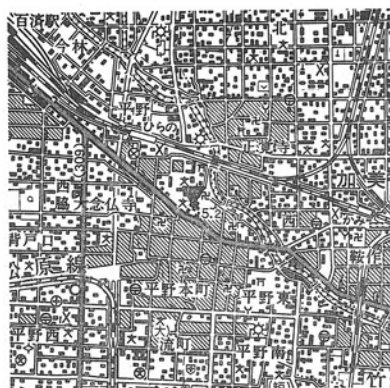


大阪・平野環濠都市遺跡  
ひらの かんこう



(大阪東南部)

調査地は、中世に堺と並んで海外貿易に雄飛して繁栄した環濠都市「平野」の一角を占める。平野は江戸時代になると当初は幕府の直轄地となったが、元禄七年(一六九四)武州川越藩領となったのを皮切りに大名領地となった。以後、いくつかの大名が平野を支配したが、宝暦十二年(一七六二)下総国古河藩領となつてからはそのまま一貫して明治維新を迎えた。古河藩

- 1 所在地 大阪市平野区平野宮町一
- 2 調査期間 一九九二年(平4)四月
- 3 発掘機関 財大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 中村博司
- 5 遺跡の種類 環濠都市跡・陣屋跡
- 6 遺跡の年代 中世〜江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

藩主の土井氏は、土井利勝を家祖とする有力な譜代大名であるが、平野を重視して新たに平野泥堂町に陣屋を設け、関西地方に散在する古河藩領支配の拠点とした。その平野陣屋の設けられた場所が現在の平野小学校の校地、すなわち今回の調査地を含む地域である。調査は僅か二日間の立会調査であつたが、この古河藩陣屋にかかわるものとみられる井戸を検出し、そのなかから左記の木簡三点を含む遺物(瓦・陶磁器等)を発見した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「摂州平野郷土井大炊頭陣屋ニ而江戸同上屋敷」

○ 清水太左衛門殿 信太九右衛門

恩田経次郎殿 金子十郎兵衛

225×76×6 011

(2) 「摂州住吉郡平野郷土井大炊頭陣屋ニ而従京都同」

〓 油小路屋鋪

○ 堀 吉左衛門殿 来次穂次郎

岡村 林 殿 成島嘉<sup>〔兵カ〕</sup>衛

・〓

〓 堀京<sup>〔兵カ〕</sup>從<sup>〔兵カ〕</sup>而<sup>〔兵カ〕</sup>ニ<sup>〔兵カ〕</sup>屋<sup>〔兵カ〕</sup>車<sup>〔兵カ〕</sup>頭<sup>〔兵カ〕</sup>吹<sup>〔兵カ〕</sup>大<sup>〔兵カ〕</sup>井<sup>〔兵カ〕</sup>土<sup>〔兵カ〕</sup>郷<sup>〔兵カ〕</sup>野<sup>〔兵カ〕</sup>本<sup>〔兵カ〕</sup>郡<sup>〔兵カ〕</sup>古<sup>〔兵カ〕</sup>河<sup>〔兵カ〕</sup>藩<sup>〔兵カ〕</sup>領<sup>〔兵カ〕</sup>小<sup>〔兵カ〕</sup>時<sup>〔兵カ〕</sup>回<sup>〔兵カ〕</sup>陣<sup>〔兵カ〕</sup>屋<sup>〔兵カ〕</sup>ニ<sup>〔兵カ〕</sup>而<sup>〔兵カ〕</sup>従<sup>〔兵カ〕</sup>京<sup>〔兵カ〕</sup>都<sup>〔兵カ〕</sup>同<sup>〔兵カ〕</sup>

225×70×7 011

(3) 「○古河家中□□□□□」

360×38×10 011

以上三点はその形態、書式等からみていずれも荷札であったと思われる。(1)と(2)はほぼ同大・同形で、書式も同じ。(1)は江戸の古河藩邸から、(2)は京都の藩邸から平野陣屋に送られて来たもので、送り主はそれぞれの藩邸勤番の武士、受取人は平野陣屋勤番の武士である。受取人の四名は当地の杭全神社にある宗門人別改帳によって幕末期(天保・慶応)の平野陣屋役人であったことが判明するので、これらの木簡が一九世紀中葉以後のものであることが確定できた。なお、木簡に記された「土井大炊頭」は一四代利則もしくは一五代利与が考えられる。(3)はやや長大なもので、下半部が判読しがたいが、人名の可能性がある。

なお、この井戸枠に使われていた桶側の胴部外面と出土品の蓋板にも墨書が残されていた。その内、桶側の文字は次のようなものである。

(4) 「晏」

150×55 (桶の寸法)

これらの資料は、わずかな点数ではあるが幕藩体制下で地方行政を担っていた武士の動向の一端を物語る資料として貴重な遺品であると言える。

最後に、この報告の木簡四点の釈読については当協会の豆谷浩之、鳥居信子両氏の協力を得たが、その際後掲文献の釈文を一部改めた。

9 関係文献

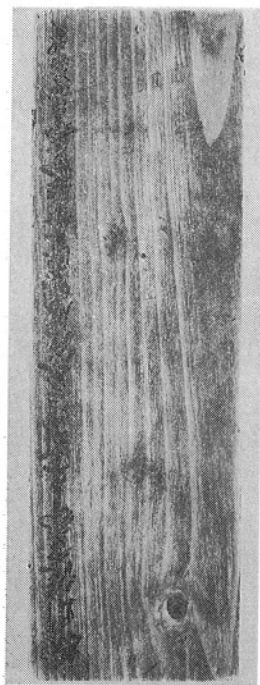
中村博司「平野小学校の地下から発見された木簡」(大阪府文化財協会『葦火』三七 一九九二年)  
(中村博司)



(1)



(2) 表



(2) 裏